HIJIORI LIGHT PROJECT 2008

灯籠「ひじおりの灯」が照らしだす、肘折温泉1201年目の夏。

約4,000人の村民が暮らす、慎ましく雪深い村・山形県最上郡大蔵村の、さらに山の奥底に「肘折温泉」はあります。肘折は観光を目的とした温泉地ではありません。自然とともに生きる農業中心の暮らしにあわせて農閑期に骨休みをする、古くからの湯治場として知られています。また、月山の登山口でもあることから、江戸時代は山岳信仰の霊湯として栄えました。現在では夜明けとともに立つ朝市に緑濃い山菜がならび、お年寄りたちが狭い路地から路地へ、下駄を鳴らしながらのんびりと行き交う穏やかな風情が好まれて、年間12万人の湯治客を迎えています。

肘折温泉は昨年夏、開湯から1200年を迎えました。小さな温泉街には郷里の歴史的な日を祝うたくさんの人々が集い、さまざまな神事やイベントがおこなわれましたが、そんな中、温泉街通りでほのかに灯る23基の灯籠（とうろう）がありました。八角の灯籠「ひじおりの灯」は、東北芸術工科大学が推進する東北ルネサンスプロジェクトの地域活性化モデル事業として、教員と学生が肘折地区からの要請を受けて制作したものです。

灯籠の骨組みは、庄内地方の建具職人が、自慢の伝統工芸「組子」の技術で組み上げ、紙は地元産の手漉き「月山和紙」を選びました。日本画を学ぶ画学生たちは、そこに温泉街の景色や、瑞々しい山菜、岩山に穿かれた地蔵倉や、大蛇伝説、朝市の賑わいなど、この地の様々な風物を描きました。山形の伝統技能に支えられ、美しく表装された若者たちの灯籠絵は、温泉街の目抜き通りに立ち並ぶ23軒の旅館の軒先に吊るされて、湯治場の夜を幻想的にライトアップしました。湯治客は夕涼みを兼ねて、灯籠を眺めに温泉街を巡り歩きました。
そして今年もまた、31人の若者たちが肘折で制作をおこない、新たな灯籠絵が、7月13日に開催される修験の火祭りにあわせた点灯に備えています。

都市の喧騒を離れて母なる大河・最上川を渡り、雪を冠した月山を眺めながら蕎麦の花咲く高原を抜け、カルデラ盆地の底へと一気に下ったら… そこには古の日本を感じる温泉街と、「ひじおりの灯」が静かに点灯してあなたの来訪を待っています。

東北ルネサンスプロジェクト in 肘折

プロジェクトリーダー——赤坂憲雄（東北芸術工科大学大学院長・東北文化研究センター所長）
肘折温泉プロジェクト実行委員会——柿崎操策（優心の宿 観月）／渡部恒夫（肘折地区）／須藤修一（カネヤマ商店）
柿崎泉（ゑびす屋）／安彦加一（大蔵村役場）／福本浩（福本屋）
木村裕吉（木村屋）／柿崎雄一（つたや金兵衛）／高山茂（松屋）
早坂隆一（そば処 寿屋）
アドバイザー（東北芸術工科大学教員）——森繁哉（舞踏家・民俗学者／教授）／竹内昌義（建築家／教授）
辻けい（美術家／教授）／山崎和樹（染色家／准教授）／石井博康（美術家／教授）
若月公平（銅版画家／教授）／番場三雄（日本画家／准教授）
コーディネーター——宮本武典（東北芸術工科大学主任学芸員）
柿崎雄一（つたや肘折ホテル代表取締役）
参加アーティスト——東北芸術工科大学学生・大学院生有志（代表：佐藤賀奈子・立花泰香）
洋画コース卒業生有志（佐藤真衣・佐藤妙子・後藤拓朗）
特別出品——若月公平（東北芸術工科大学教授）
灯籠制作——庄内木工技術研究会（組子制作・表具）／下山基行（鍛造金具）
三浦一之（月山和紙）
主催——東北芸術工科大学 十 肘折地区
協力——アサヒビール株式会社（山形支店）

第2回 灯籠絵鑑賞会　東北ルネサンスプロジェクト事業

ひじおりの灯

HIJIORI Light project

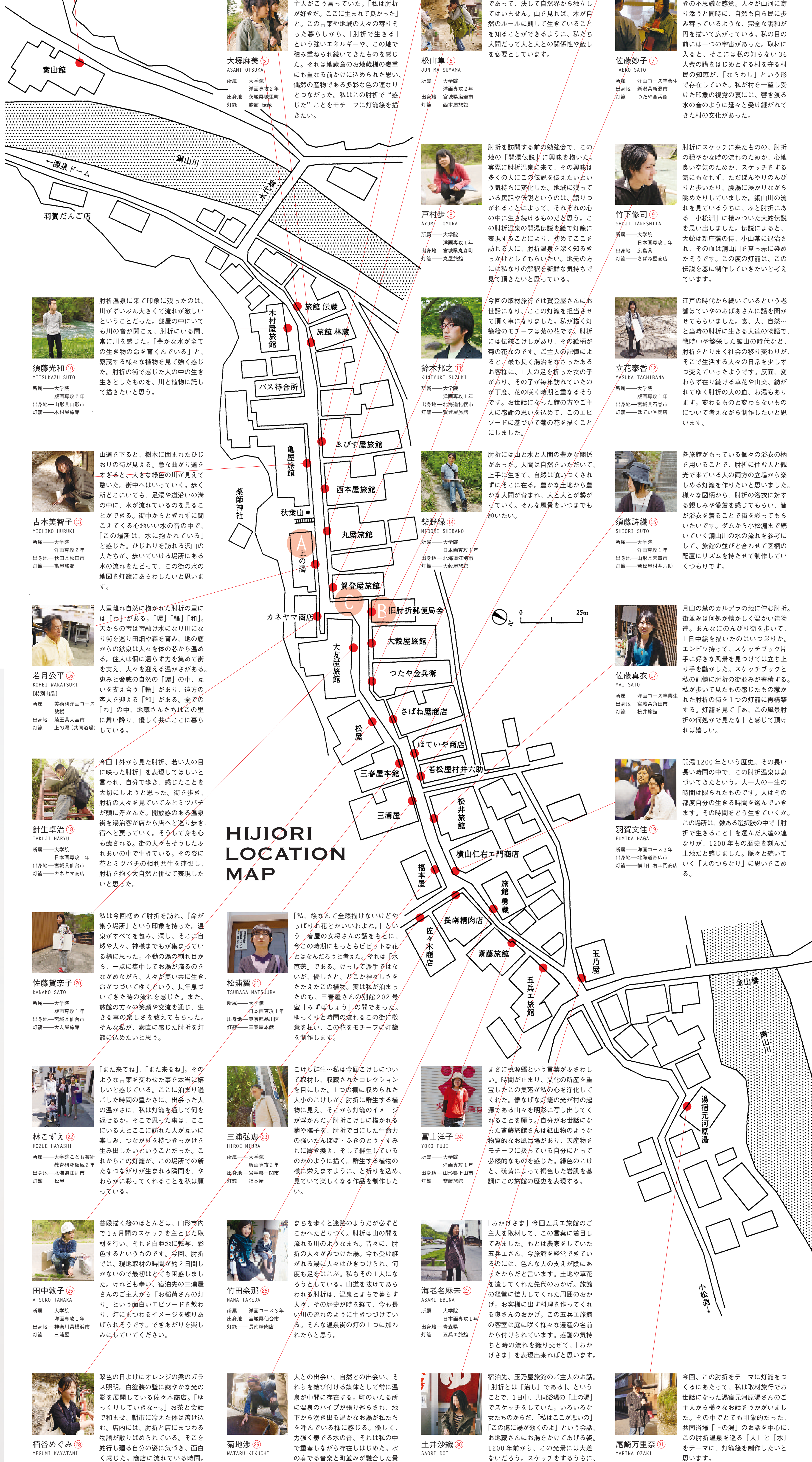
2008年7月13日［日］→8月20日［水］
山形県最上郡大蔵村肘折温泉
点灯時間＝18時30分〜20時　※雨天・強風時は点灯しない場合があります。
主催＝東北芸術工科大学 十 肘折地区　www.tuad.ac.jp/museum
協力＝アサヒビール株式会社（山形支店）

TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN

HIJIORI Light project

Light design : Masayoshi Takeuchi／Artwork : Takuro Goto／Photo : JEYONE

HIJIORI LOCATION MAP



斉藤修 ①
SHU SAITO
所属——大学院 版画専攻1年
出身地——岩手県盛岡市
灯籠——葉山館

取材旅行では葉山館でお世話になった。食事に出された山菜がおいしく、ご主人との会話の中で、山菜を題材にすることを提案した。取材スケッチでは、ゼンマイの生々しい生物的な姿に強く興味を持ち、絵の題材として選んだ。灯籠という東洋の美術品の雰囲気と、自分の趣味である書を生かした作品に仕上げたいと思っている。自ら満足できる作品になるよう努力するつもりだ。

加藤彩子 ②
AYAKO KATO
所属——大学院 洋画専攻2年
出身地——秋田県湯沢市
灯籠——旅館 林蔵

私が普段、制作でおこなうフロッタージュという技法がある。この技法は物の上に紙をおき、上から鉛筆などでこすり物体の形を浮かび上がらせるものである。取材旅行では、この方法で肘折の色々なものを紙に写し取ってきた。灯籠には、この写し取ったものを組み合わせ、さらに自分で描き込んで制作してゆく。そうすることによって、私が手で描いた線と、肘折の様々な痕跡が1つに混じり合うことが出来る。私と肘折の混じり具合を1つの灯籠にまとめたいと考えている。

岩本陽子 ③
YOKO IWAMOTO
所属——大学院 日本画専攻1年
出身地——神奈川県横須賀市
灯籠——ゑびす屋旅館

ゑびす屋旅館にある、天然杉の天板や踏み板の木目を灯籠絵のモチーフにした。荒々しい木目は、春の雪どけ水で増水した川の水面に似ている。私は以前、夏に肘折を訪れたことがある。そのときも印象に残ったのが、銅山川と水の音。どこにいても水の音が聞こえる、水に囲まれた街。木目を利用して、肘折の川と水の音を表現したい。

後藤拓朗 ④
TAKURO GOTO
所属——洋画コース卒業生
出身地——山形県山形市
灯籠——旧肘折郵便局舎

生まれてからずっと山形市に住んでいた僕にとって、四方を取り囲む山並みは視界を制限し外界への羨望をかきたてる「柵」の様な存在だった。しかし肘折における山並みのサークルは決して後ろ向きな印象を与えるものではなく、土地を現世から隔絶し聖域をかたちづくる境界として存在していた。もともと凡百の山の1つに過ぎない場所に瞬間的に土地の要素が生まれ、特異な時間空間を生きる人々の流れや関わりに注目し、制作した。

大塚麻美 ⑤
ASAMI OTSUKA
所属——大学院 洋画専攻2年
出身地——茨城県城里町
灯籠——旅館 伝蔵

灯籠を設置させていただく旅館のご主人がこう言っていた。「私は肘折が好きだ。ここに生まれて良かった」と。この言葉や地域の人々の寄りそった暮らしから、「肘折で生きる」という強いエネルギーや、この地で積み重ねられ続いてきたものを感じた。それは地蔵倉のお地蔵様の幾重にも重なる前かけに込められた思い、偶然の産物である多彩な色の連なりとつながった。私はこの肘折で“感じた”ことをモチーフに灯籠絵を描きたい。

松山隼 ⑥
JUN MATSUYAMA
所属——大学院 洋画専攻2年
出身地——宮城県塩釜市
灯籠——西本屋旅館

「人間」は、自然の細分化された姿であって、決して自然界から独立してはいません。山を見れば、木が自然のルールに則して生きていることを知ることができるように、私たち人間だって人と人との関係性や癒しを必要としています。

佐藤妙子 ⑦
TAEKO SATO
所属——洋画コース卒業生
出身地——新潟県新潟市
灯籠——つたや金兵衛

大蔵村を小松淵の上から一望したときの不思議な感覚。人々が山河に寄り添うと同時に、自然も自ら民に歩み寄っているような、完全な調和が円を描いて広がっている。私の目の前には一つの宇宙があった。取材に入ると、そこには私の知らない36人衆の講をはじめとする村を守る村民の知恵が、「ならわし」という形で存在していた。私が村を一望し受けた印象の視覚の裏には、響き渡る水の音のように延々と受け継がれてきた村の文化があった。

戸村歩 ⑧
AYUMI TOMURA
所属——大学院 洋画専攻1年
出身地——宮城県丸森町
灯籠——丸屋旅館

肘折を訪問する前の勉強会で、この地の「開湯伝説」に興味を抱いた。実際に肘折温泉に来て、その興味は多くの人にこの伝説を伝えたいという気持ちに変化した。地域に残っている民話や伝説というのは、語りつがれることによって、それぞれの心の中に生き続けるものだと思う。この肘折温泉の開湯伝説を絵で灯籠に表現することにより、初めてここを訪れる人に、肘折温泉を深く知るきっかけとしてもらいたい。地元の方には私なりの解釈を新鮮な気持ちで見て頂きたいと思っている。

竹下修司 ⑨
SHUJI TAKESHITA
所属——大学院 日本画専攻1年
出身地——広島県
灯籠——さばね屋商店

肘折にスケッチに来たものの、肘折の穏やかな時の流れのためか、心地良い空気のためか、スケッチをする気にもなれず、ただぼんやりのんびりと歩いたり、腰湯に浸かりながら眺めたりしていました。銅山川の流れを見ているうちに、ふと肘折にある「小松淵」に棲みついた大蛇伝説を思い出しました。伝説によると、大蛇は新庄藩の侍、小山某に退治され、その血は銅山川を真っ赤に染めたそうです。この度の灯籠は、この伝説を基に制作していきたいと考えています。

須藤光和 ⑩
MITSUKAZU SUTO
所属——大学院 版画専攻2年
出身地——山形県山形市
灯籠——木村屋旅館

肘折温泉に来て印象に残ったのは、川がずいぶん大きくて流れが激しいということだった。部屋の中にいても川の音が聞こえ、肘折にいる間、常に川を感じた。「豊かな水が全ての生き物の命を育くんでいる」と、繁茂する様々な植物を見て強く感じた。肘折の街で感じた人の中の生き生きとしたものを、川と植物に託して描きたいと思う。

鈴木邦之 ⑪
KUNIYUKI SUZUKI
所属——大学院 洋画専攻1年
出身地——北海道札幌市
灯籠——賀登屋旅館

今回の取材旅行では賀登屋さんにお世話になり、ここの灯籠を担当させて頂く事になりました。私が描く灯籠絵のモチーフは菊の花です。肘折には伝統こけしがあり、その絵柄が菊の花なのです。ご主人の記憶によると、最も長く湯治をなさったあるお客様に、1人の足を折った女の子がおり、その子が毎年訪れていたのが丁度、花の咲く時期と重なるそうです。お世話になった館の方やご主人に感謝の思いを込めて、このエピソードに基づいて菊の花を描くことにしました。

立花泰香 ⑫
YASUKA TACHIBANA
所属——大学院 版画専攻1年
出身地——宮城県石巻市
灯籠——ほていや商店

江戸の時代から続いているという老舗ほていやのおばあさんに話を聞かせてもらいました。食、人、自然…と当時の肘折に生きる人達の物語で、戦時中や繁栄した鉱山の時代など、肘折をとりまく社会の移り変わりが、そこで生活する人々の日常を少しずつ変えていったようです。反面、変わらず在り続ける草花や山菜、紡がれてゆく肘折の人の血、お湯もあります。変わるものと変わらないものについて考えながら制作したいと思います。

古木美智子 ⑬
MICHIKO HURUKI
所属——大学院 洋画専攻2年
出身地——秋田県秋田市
灯籠——亀屋旅館

山道を下ると、樹木に囲まれたひじおりの街が見える。急な曲がり道をすぎると、大きな緑色の川が見えて驚いた。街中へはいっていく。歩く所どこにいても、足湯や道沿いの溝の中に、水が流れているのを見ることができる。街中からとぎれずに聞こえてくる心地いい水の音の中で、「この場所は、水に抱かれている」と感じた。ひじおりを訪れる沢山の人たちが、歩いていける場所にある水の流れをたどって、この街の水の地図を灯籠にあらわしたいと思います。

柴野緑 ⑭
MIDORI SHIBANO
所属——大学院 日本画専攻1年
出身地——北海道江別市
灯籠——大穀屋旅館

肘折には山と水と人間の豊かな関係があった。人間は自然をいただいて、上手に生きて、自然は喰いつくされずにそこに在る。豊かな土地から豊かな人間が育まれ、人と人とが繋がっていく。そんな風景をいつまでも願いたい。

須藤詩織 ⑮
SHIORI SUTO
所属——大学院 洋画専攻1年
出身地——山形県天童市
灯籠——若松屋村井六助

各旅館がもっている個々の浴衣の柄を用いることで、肘折に住む人と観光で来ている人の両方の立場から楽しめる灯籠を作りたいと思いました。様々な図柄から、肘折の浴衣に対する親しみや愛着を感じてもらい、皆が浴衣を着ることで街を彩ってもらいたいです。ダムから小松淵まで続いていく銅山川の水の流れを参考にして、旅館の並びと合わせて図柄の配置にリズムを持たせて制作していくつもりです。

若月公平 ⑯
KOHEI WAKATSUKI
［特別出品］
所属——美術科洋画コース 教授
出身地——埼玉県大宮市
灯籠——上の湯（共同浴場）

人里離れ自然に抱かれた肘折の里には「わ」がある。「環」「輪」「和」。天からの雪は雪融け水になり川になり街を巡り田畑や森を育み、地の底からの鉱泉は人々を体の芯から温める。住人は個に還らず力を集めて街を支え、人々を迎える温かさがある。恵みと脅威の自然の「環」の中、互いを支え合う「輪」があり、遠方の客人を迎える「和」がある。全ての「わ」の中、地蔵さんたちはこの里に舞い降り、優しく共にここに暮らしている。

佐藤真衣 ⑰
MAI SATO
所属——洋画コース卒業生
出身地——宮城県角田市
灯籠——松井旅館

月山の麓のカルデラの地に佇む肘折。街並みは何処か懐かしく温かい建物達。あんなにのんびり街を歩いて、1日中絵を描いたのはいつぶりか。エンピツ持って、スケッチブック片手に好きな風景を見つけては立ち止り手を動かした。スケッチブックと私の記憶に肘折の街並みが蓄積する。私が歩いて見たもの感じたもの惹かれた肘折の街を1つの灯籠に再構築する。灯籠を見て「あ、この風景肘折の何処かで見たな」と感じて頂ければ嬉しい。

針生卓治 ⑱
TAKUJI HARYU
所属——大学院 日本画専攻1年
出身地——宮城県仙台市
灯籠——カネヤマ商店

今回「外から見た肘折、若い人の目に映った肘折」を表現してほしいと言われ、自分で歩き、感じたことを大切にしようと思った。街を歩き、肘折の人々を見ていてふとミツバチが頭に浮かんだ。開放感のある温泉街を湯治客が店から店へと巡り歩き、宿へと戻っていく。そうして身も心も癒される。街の人々もそうしたふれあいの中で生きている。その姿に花とミツバチの相利共生を連想し、肘折を抱く大自然と併せて表現したいと思った。

羽賀文佳 ⑲
FUMIKA HAGA
所属——洋画コース3年
出身地——北海道帯広市
灯籠——横山仁右ェ門商店

開湯1200年という歴史。その長い長い時間の中で、この肘折温泉は息づいてきたという。人一人の一生の時間は限られたものです。人はその都度自分の生きる時間を選んでいきます。その時間をどう生きていくか。この場所は、数ある選択肢の中で「肘折で生きること」を選んだ人達の連なりが、1200年もの歴史を刻んだ土地だと感じました。脈々と続いていく「人のつらなり」に思いをこめる。

佐藤賀奈子 ⑳
KANAKO SATO
所属——大学院 版画専攻1年
出身地——宮城県仙台市
灯籠——大友屋旅館

私は今回初めて肘折を訪れ、『命が集う場所』という印象を持った。温泉がすべてを包み、潤し、そこに自然や人々、神様までもが集まっている様に思った。不動の湯の割れ目から、一点に集中してお湯が滴るのをながめながら、人々が集い共に生き、命がつづいてゆくという、長年息づいてきた時の流れを感じた。また、旅館の方々の笑顔や交流を通じ、生きる事の楽しさを教えてもらった。そんな私が、素直に感じた肘折を灯籠に込めたいと思う。

松浦翼 ㉑
TSUBASA MATSUURA
所属——大学院 日本画専攻1年
出身地——東京都品川区
灯籠——三春屋本館

「私、絵なんて全然描けないけどやっぱりお花とかいいわよね。」という三春屋の女将さんの話をもとに、今この時期にもっともビビットな花とはなんだろうと考えた。それは「水芭蕉」である。けっして派手ではないが、優しさと、どこか神々しさをたたえたこの植物。実は私が泊まったのも、三春屋さんの別館202号室「みずばしょう」の間であった。ゆっくりと時間の流れるこの街に敬意を払い、この花をモチーフに灯籠を制作します。

林こずえ ㉒
KOZUE HAYASHI
所属——大学院こども芸術教育研究領域2年
出身地——北海道江別市
灯籠——松屋

「また来てね」、「また来るね」。そのような言葉を交わせた事を本当に嬉しいと感じている。ここに泊まり過ごした時間の豊かさに、出会った人の温かさに、私は灯籠を通して何を返せるか。そこで思った事は、ここにいる人とここに訪れた人が互いに楽しみ、つながりを持つきっかけを生み出したいということだった。これからこの灯籠が、この場所での新たなつながりが生まれる瞬間を、やわらかに彩ってくれることを私は願っている。

三浦弘恵 ㉓
HIROE MIURA
所属——大学院 版画専攻2年
出身地——岩手県一関市
灯籠——福本屋

こけし群生…私は今回こけしについて取材し、収蔵されたコレクションを目にした。1つの棚に収められた大小のこけしが、肘折に群生する植物に見え、そこから灯籠のイメージが浮かんだ。肘折こけしに描かれる菊や撫子を、肘折で目にした生命力の強いたんぽぽ・ふきのとう・すみれに置き換え、そして群生しているのかのように描く。群生する植物の様に栄えますようにと祈りを込め、見ていて楽しくなる作品を制作したい。

冨士洋子 ㉔
YOKO FUJI
所属——大学院 洋画専攻1年
出身地——山形県上山市
灯籠——斎藤旅館

まさに桃源郷という言葉がふさわしい。時間が止まり、文化の所産を重宝したこの集落が私の心を浄化してくれた。儚なげな灯籠の光が村の起源である山々を明彩に写し出してくれることを願う。自分がお世話になった斎藤旅館さんは鉱山物のような物質的なお風呂場があり、天産物をモチーフに扱っている自分にとって必然的なものを感じた。緑色のこけと、硫黄によって褐色した岩肌を基調にこの旅館の歴史を表現する。

田中敦子 ㉕
ATSUKO TANAKA
所属——大学院 洋画専攻1年
出身地——神奈川県横浜市
灯籠——三浦屋

普段描く絵のほとんどは、山形市内で1ヵ月間のスケッチを主とした取材を行い、それを白亜地に転写、彩色するというものです。今回、肘折では、現地取材の時間が約2日間しかないので最初はとても困惑しました。けれども幸い、宿泊先の三浦屋さんのご主人から「お稲荷さんの灯り」という面白いエピソードを教わり、灯にまつわるイメージを練りあげられそうです。できあがりを楽しみにしていてください。

竹田奈那 ㉖
NANA TAKEDA
所属——洋画コース3年
出身地——宮城県仙台市
灯籠——長南精肉店

まちを歩くと迷路のようだが必ずどこかへたどりつく。肘折は山の間を流れる川のようなまち。昔々に、肘折の人々がみつけた湯。今も受け継がれる湯に人々はひきつけられ、何度も足をはこぶ。私もその1人になろうとしている。山道を抜けてあらわれる肘折は、温泉とまちで暮らす人々、その歴史が時を経て、今も長い川の流れのように生きつづけている。そんな温泉街の灯の1つに加われたらと思う。

海老名麻未 ㉗
ASAMI EBINA
所属——大学院 日本画専攻1年
出身地——青森県
灯籠——五兵ェ旅館

「おかげさま」今回五兵ェ旅館のご主人を取材して、この言葉に着目してみました。もとは農家をしていた五兵ェさん、今旅館を経営できているのには、色んな人の支えが陰にあったからだと言います。土地や草花を遺してくれた先代のおかげ。旅館の経営に協力してくれた周囲のおかげ。お客様に出す料理を作ってくれる奥さんのおかげ。この五兵ェ旅館の客室は庭に咲く様々な遺産の名前から付けられています。感謝の気持ちと時の流れを織り交ぜて、「おかげさま」を表現出来ればと思います。

栢谷めぐみ ㉘
MEGUMI KAYATANI
所属——大学院こども芸術教育研究領域2年
出身地——北海道札幌市
灯籠——佐々木商店

翠色の日よけにオレンジの梁のガラス照明。白塗装の壁に爽やかな光の影を展開している佐々木商店。「ゆっくりしていきな〜。」お茶と会話で和ませ、朝市に冷えた体は溶け込む。店内には、肘折と店にまつわる物語が散りばめられている。そこを蛇行し廻る自分の姿に気づき、面白く感じた。商店に流れている時間。私の中に流れた時間。2つの時が調和した灯籠と出会い、あなたに生まれた肘折の時間を辿ってほしい。「明日もおいで」声が掛かる。

菊地渉 ㉙
WATARU KIKUCHI
所属——大学院 洋画専攻1年
出身地——宮城県仙台市
灯籠——旅館 勇蔵

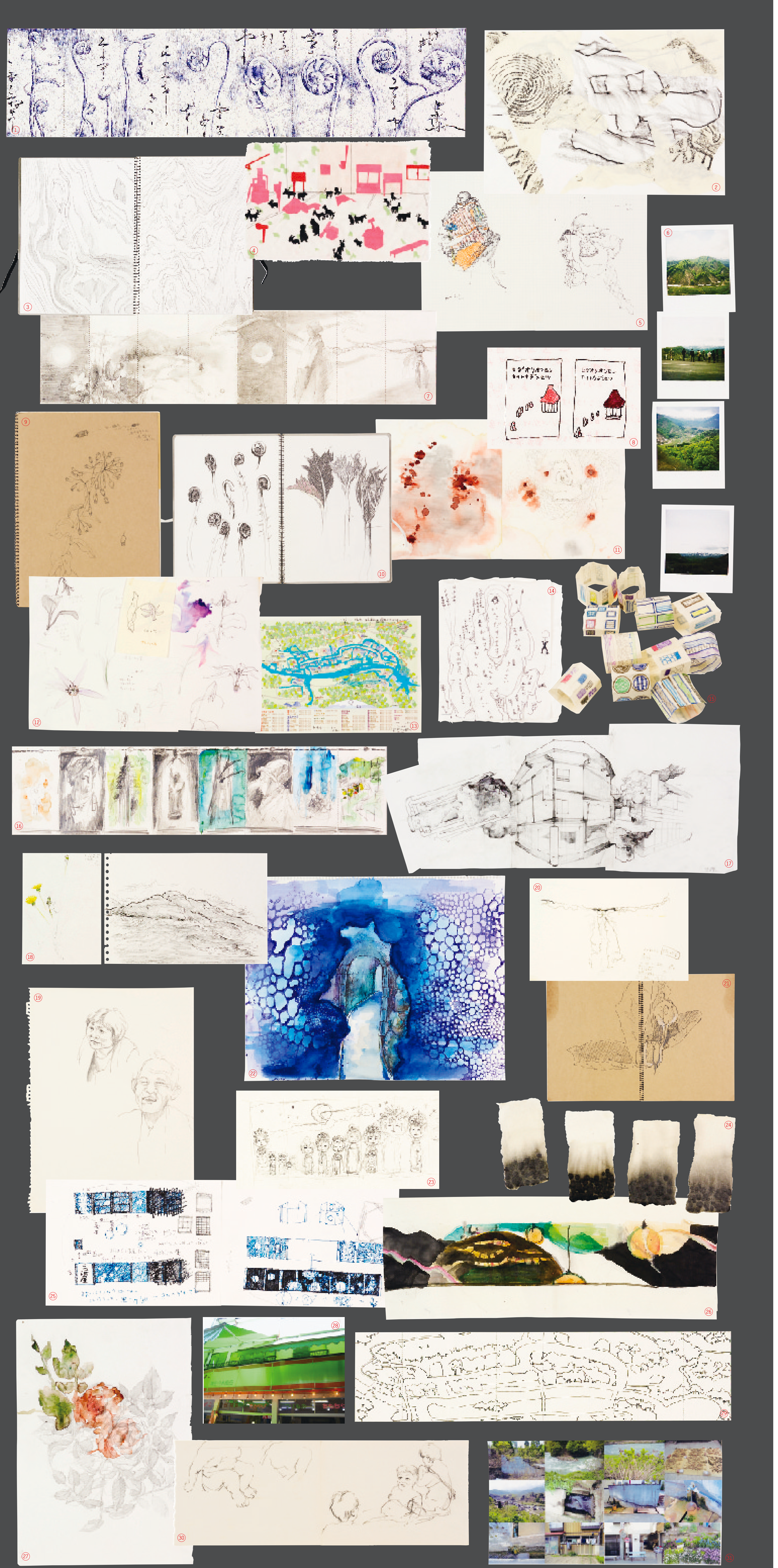
人との出会い、自然との出会い、それらを結び付ける媒体として常に温泉が中間に存在する。町のいたる所に温泉のパイプが張り巡らされ、地下から湧き出る温かなお湯が私たちを呼んでいる様に感じる。優しく、力強く奏でる水の音、それは私の中で重奏しながら存在しはじめた。水の奏でる音楽と町並みが融合した景色を灯籠の中に表現し、町行く人々の目と耳で、灯籠絵のリズムを感じてもらえれば良いのではないだろうか。

土井沙織 ㉚
SAORI DOI
所属——大学院 日本画専攻1年
出身地——東京都町田市
灯籠——玉乃屋

宿泊先、玉乃屋旅館のご主人のお話。「肘折とは『治し』である」、ということで、1日中、共同浴場の「上の湯」でスケッチをしていた。いろいろな女たちのからだ、「私はここが悪いの」「この傷に湯が効くのよ」という会話、お地蔵さんにお湯をかけてあげる姿。1200年前から、この光景には大差ないだろう。スケッチをするうちに、女性の体に興味を持った。いろいろな体たちが、湯けむりの中でつながる姿を描きたいと思った。

尾崎万里奈 ㉛
MARINA OZAKI
所属——大学院こども芸術教育研究領域1年
出身地——神奈川県藤沢市
灯籠——湯宿元河原湯

今回、この肘折をテーマに灯籠をつくるにあたって、私は取材旅行でお世話になった湯宿元河原湯さんのご主人から様々なお話をうかがいました。その中でとても印象的だった、共同浴場「上の湯」のお話を中心に、この肘折温泉を巡る『人』と『水』をテーマに、灯籠絵を制作したいと思います。



31 DRAWINGS

2008年5月10日から12日まで、「ひじおりの灯」制作のために2泊3日でおこなわれた肘折温泉への取材旅行には、東北芸術工科大学大学院で洋画、版画、日本画、美術教育を学ぶ画学生の他、卒業生数名も参加しました。ブナの萌葱色に包まれた初夏の肘折を訪れた若者たちは、温泉街全体で散り散りに分宿し、各旅館のご主人や女将さんの歓待に応えるように、精力的に土地の歴史にまつわる聞き書き調査とスケッチをおこないました。ここに掲載した絵や写真は、その時にスケッチブックやメモ帳に記録された灯籠絵の断片です。森と里の境界に立つ六地蔵、水芭蕉やゼンマイ、肘折系のコケシ、葉山の眺望、浴衣の柄、湯に浸かる女たち、わき出す源泉と温泉街を貫く銅山川、人々の手をつなぐ巨大な数珠、絶え間ない水の音…。これら肘折的宇宙を構築する生命力あふれるモチーフを駆使して、山形で美術を学んだ総勢31名の若者が、肘折温泉1201年目の夏を彩る壮麗な絵物語に挑みます。

ART PROJECTS

絵描きの卵たちは、肘折をどのように表現したのか？ 作者による夜の作品解説トークリレー「肘折絵語り・夜語り」。 MAP A

肘折でそれぞれのテーマや題材を見つけ、灯籠絵を描いた東北芸術工科大学の学生・教員・卒業生31名が、旅館や商店の軒先に吊るされた自作のそばで作品解説をおこないます。夕刻から温泉街をそぞろ歩きながら、若者たちの肘折物語に眼と耳を澄ましてみませんか。
開催日時：2008年7月14日［月］ 18:00〜21:00
会場：肘折温泉街（18:00に「上の湯」を出発）
鑑賞順路：「上の湯」→「葉山館」方面→旧肘折郵便局舎（小休止）→「元河原湯」方面　※雨天・強風時は「上の湯」2Fで開催します。

2007年の「肘折絵語り・夜語り」松井旅館前にて

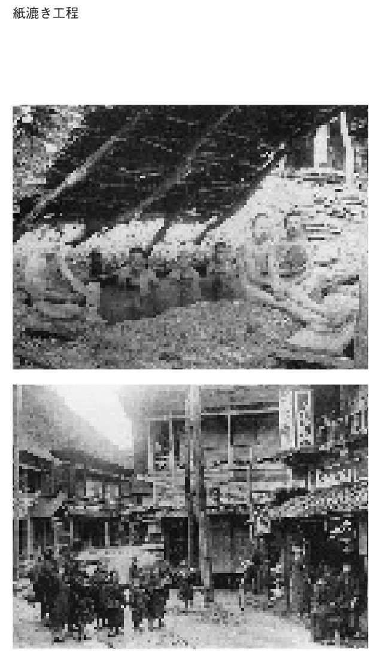
肘折の鉱泉で糸を染め、採取した植物を 月山和紙に漉き込んだ大型のテキスタイル作品 「肘折媒染（ひじおりばいせん）」が、上の湯の内壁に設置されます。 MAP A

東北芸術工科大学で染色技術を学んでいる学生たちが、天然染料で染めた糸を肘折温泉の源泉や黄金温泉のソーダ、銅山川、苦水川などに浸し、〈媒染〉しました。肘折の風や太陽で染めあげられた糸は、その後、月山和紙に漉き込まれ、共同浴場「上の湯」の壁面に、あらたな“ひじおりの風景”を創出します。
公開期間：2008年7月より恒久設置
設置場所：共同浴場「上の湯」内壁
壁画制作：加納里美／坂内まゆ子／佐々木周平／二階堂恵／平田真理江／平塚太一郎／藤本紗世／松田かや（工芸コーステキスタイル専攻4年）
のれん制作：加藤みな美（大学院工芸領域1年）
制作指導：辻けい／山崎和樹／柳田哲雄（補助）
紙漉指導：三浦一之

上：石抱温泉で媒染する学生たち　下：月山和紙工房での紙漉き工程

「古き良き」湯治場として昔から人々に語られてきた肘折。 芸工大プロデュースの復刻絵葉書に、 温泉街の今昔を見る。

東北文化研究センターが収集・公開している膨大な絵葉書データベースの中から、肘折温泉に関するアーカイヴの一部を復刻絵葉書として再生しました。今も変わらぬ「地蔵倉」、板塀だった「上の湯」、秘湯感あふれる「石抱温泉」…。白黒の絵葉書片手に歩いてみれば、この街のささやかな変遷を伺い知ることができます。
企画監修：赤坂憲雄
デザイン：鈴木敏志（JEYONE）
写真提供：東北文化研究センター／肘折地区・肘折温泉郷振興（株）
販売：肘折温泉商店組合　※各商店や旅館のフロント、肘折いでゆ館で購入できます。



上：石抱温泉のユニークな入浴風景　下：さばね屋商店前から旧肘折郵便局舎方面を眺める

CAFÉ & GALLERY

湯治客が行き交う目抜き通りのランドマーク、 木造モダンの旧肘折郵便局舎が、 期間限定のギャラリー＆バーに変身します。 MAP B

2007年度の「ひじおりの灯」で発表された灯籠絵を木枠から外し、あらたに額装して旧肘折郵便局舎内に展示します。今後、常設展示ギャラリーとしての活用が予定されている局舎内の改装は建築家・竹内昌義教授の研究室が手がけました。「肘折絵語り・夜語り」の夜には、期間限定のバーとしてもオープンします。

「**gallery ひじおりの灯**」
開廊期間：2008年7月13日［日］〜8月20日［水］ 9:00〜21:00
※土・日・祝日は常時オープンしていますが、平日は鑑賞台帳にお名前を記入の上、「カネヤマ商店」か「お茶道楽ワゴン」で旧肘折郵便局舎の鍵を借りてご鑑賞ください。なお、8月24日［日］〜11月3日［月］までは日・祭日のみ限定でオープンしています。
会場：旧肘折郵便局舎内
会場設計：亀岡真彦（大学院建築デザイン領域1年）

「**Bar 郵便局**」
オープン期間：2008年7月12日［土］〜14日［月］18:00〜22:00
企画・運営：建築・環境デザイン学科 竹内昌義研究室

旧肘折郵便局舎

あなたの体調にぴったりのお茶、お教えします。 世界のお茶を満載した移動式茶屋、 「お茶道楽」が水戸から肘折に出張営業。 MAP C

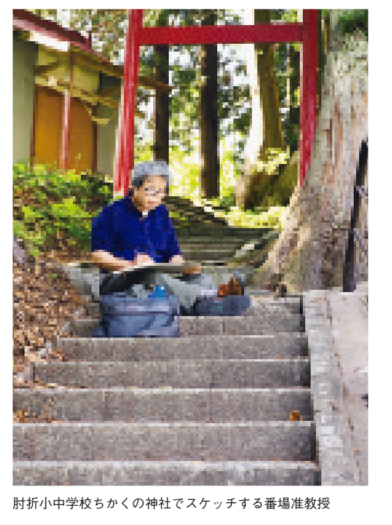
水戸在住のアーティスト・渡辺秀明さんによる移動式茶屋「お茶道楽」が肘折にやってきます。プロフェッショナルな「お茶マニア」渡辺さんは、軽ワゴンを改造して、身体に優しい様々な種類のお茶を、お客さんの体調にあわせて「処方」してくれます。飲む「湯治」で、身体の内側からほっこりすっきり癒されてみませんか。
滞在期間：2008年7月13日［日］〜7月下旬頃まで
営業場所：旧肘折郵便局舎前
※軽ワゴン店舗のため場所を移動する場合があります。

東北芸術工科大学こども芸大前で賑わう「お茶道楽」ワゴン

WORKSHOPS

どこをとっても「絵になる」 肘折の風物を描いてみましょう。 番場先生のスケッチ指南。（参加者募集中！）

昨年の日本美術院で大観賞を受賞した日本画家・番場三雄准教授によるスケッチ講座を肘折で開講。観るだけでなく、肘折周辺の雄大な風景や草花や温泉街の情緒を、みんなで一緒に描きましょう。「ひじおりの灯」の点灯とお祭りの時期に合わせて、1泊2日の小旅行を楽しみませんか？
開講日：2008年7月13日［日］〜14日［月］（1泊2日コース）
会場：肘折温泉　※2〜3人部屋で分宿になります。
交通：東北芸術工科大学から送迎バスを利用または現地集合
対象：スケッチ初心者から経験者まで丁寧に指導します
定員：30名（先着順／17名に満たない場合は中止とさせていただきます）
講師：番場三雄（東北芸術工科大学准教授）／日本画卒業生・大学院生
受講料：18,000円（宿泊費・旅行保険料を含みます）
申込締切：7月3日［木］
申込・お問い合わせ：東北芸術工科大学エクステンション（担当：大谷）
TEL 023-627-2091／FAX 023-627-2085
exte@aga.tuad.ac.jp



肘折小中学校ちかくの神社でスケッチする番場准教授

もうひとつの「ひじおりの灯」。 閉校の年にこどもたちが描く肘折小中学校の思い出が、 精霊流しの図案になって銅山川をくだります。

大学院で美術教育を専攻する林こずえさんが、肘折のこどもたち対象の版画ワークショップを開講します。今年、惜しまれつつ閉校する「肘折小中学校」をテーマに、こどもたちは木版画を制作。出来上がった作品は、灯籠に仕立てて精霊流しの夜に銅山川に流します。小さな地域の担い手による「ひじおりの灯」です。
開講日：2008年8月3日［日］ 10:00〜17:00
精霊流し：2008年8月17日［日］ 19:00〜
ワークショップ会場：肘折センター（「上の湯」2階）
対象：肘折地区のこどもたち（小学生・中学生）※見学自由
講師：林こずえ（大学院こども芸術教育研究領域2年）

林こずえワークショップ風景

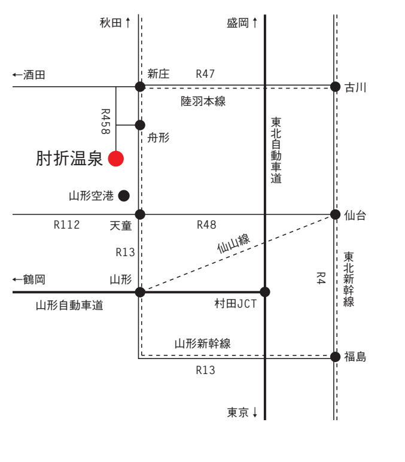
［お問い合わせ］

「ひじおりの灯」実施について→東北芸術工科大学 美術館大学構想室
〒990-9530　山形県山形市上桜田3-4-5
TEL 023-627-2043／FAX 023-627-2085
museum@aga.tuad.ac.jp

宿泊および交通について→肘折温泉広報担当
つたや肘折ホテル（担当：柿崎）
〒996-0301　山形県最上郡大蔵村肘折温泉504
TEL 0233-76-2321／FAX 0233-76-2509
kaki@tutayahijiorihotel.com

［交通のご案内］

バス：山形新幹線JR新庄駅より肘折温泉行きバスで約75分。
お車：新庄市から国道47号、国道458号で約60分。
山形市から国道13号、県道30号、国道458号で約100分。



Design : Satoshi Suzuki (JEYONE)／Printing : Tamiya Printing Co.,Ltd.